

英語教師のための

基礎講座

「音声によるパフォーマンス」の巻

高梨庸雄 Takanashi Tsuneo

(京都ノートルダム女子大学教授)

本連載の私の担当講座を終えるに当たり、音読に生気を吹き込むために音声表現のパフォーマンス(Oral Interpretation)として考えてみたい。我が国の中学校や高等学校におけるスピーチ・コンテストが、現在のような形で実施されるようになってから、ほぼ半世紀になる。それだけの歴史がある割には、生徒全般への影響はかなり限られたものである。RecitationとSpeechを合わせれば、出場者は各地で結構な数になるであろうが、それでも日本の中学・高校の生徒総数からみれば微々たるものである。日常の授業の中で、3分間スピーチとかShow and Tellのような形で実践している学校もあるが、授業全体の時間からすると、料理のスパイス的な役割にとどまっており、授業の中に自然な形で生かされているというところまでは溶け込んでいないように思われる。

理由はいくつか挙げられるが、最も大きい理由は、教師も生徒も音声表現の楽しさ、すばらしさを味わえるような場面や指導技術が、未だ授業の中に根付いていないことであろう。この点では残念ながら音読も然りである。英語の授業で音読のない授業はない、と言っても過言でないほど英語教育の日常活動として行われているのに、授業参観などで目を閉じて音読を聞いていると、そこから読む喜びや聞く喜びを感じることはまれである。もっと音読を美しく楽しいものにしたい。今回は散文と詩に絞って、その方法を探ってみることにする。

1 散文の場合：文章の主題に沿って

Oral Interpretationへの準備は何を読むかという題材によって異なる。まず、生徒が一番接する機会の多いProse(散文)を例に考えてみよう。

ア 主題をつかむ

まず第一のステップは文章の主題を把握すること

である。文章のまとまりには大小があり、比較的大きい場合は「主題」(Thesis statement)である場合が多い。比較的小さい場合は「話題、論題」(Topic)であり、わかりやすいように段落を例に考えれば、Topicを含むTopic sentence(s)が段落の「屋根」のようなものである。屋根があればそれを支える柱があるように、段落にはTopicを支える文がいくつか使われる。これをSupporting sentences(支持文)と呼び、著者の意見、主張、説明などを補強する形で述べられる。音読する文章を数回黙読しながら、文章の主題に関するとと思われる(著者の)主張や意見を見出し風にくいつか書いてみる。そして主題とどのように関連しているのかを考えるのである。

イ 主題を中心とする文章の構造

NEW CROWN, BOOK 2, LESSON 6を分析しながら文章の論理構造を考えてみよう。

Speech — 'My Dream'

Hello, everyone.

All of us will work in the future. We will have many different jobs. Some of us will work in offices. Some will work on farms. Some will want to help old people. Today I am going to tell you about my dream for the future.

この段落は、この課の本文全体の導入の役割を担っている。段落の中心となっているのはWe will have many different jobs.である。内容を読み解く鍵になっている表現はdifferent jobsである。Different jobsの中身を説明するために(言い換えれば段落の話題を含んでいる中心文を支えるために)使われているのが、その後の3文である。その3文の核になっているoffices, farms, help old peopleがdifferent jobsの具体例である。段落の最後の文は、次の段落へ架ける橋

の役割をしている (transitional sentence)。

段落 2 (p.44) と段落 3 (p.45 ; II.1-6) は、教科書のイラストの関係で 2 つの段落に分かれているが、英語の段落としてはひとつのまとまりとしてくくることができる。段落 2 の I want to be a nursery school teacher. Why? がその主題である。「なぜ、保育士になりたいのか。」理由は 2 つあるのだが、段落 2 で 1 つ、段落 3 で 1 つ、それぞれ First, Second という序数をつけて保育士になりたい理由が述べられている。同時にそれぞれが小さな段落を形成している。段落 2 は First, I like children. という中心文を説明し、段落 3 では Second, some parents need help. という中心文を自分の両親を例に引いて説明している。最後の段落 (p.45 ; II.7-12) は、段落 2、段落 3 の内容を受けて、全体をまとめる結論の段落となっている。以上述べたような文章の論理的関係が聴衆に効果的に伝わるように音読する練習を積むことによって、音声パフォーマンスに一步近づくことができる。

2 詩の場合：詩人の心を表現する

NEW CROWN, BOOK 2:

What Are Heavy? by Christina Rossetti

What are heavy?

Sea-sand and sorrow.

What are brief?

To-day and tomorrow.

What are frail?

Spring blossoms and youth.

What are deep?

The ocean and truth.

CD やテープを聞かせるのもよいが、このような単純な形式の短詩は、教師自身が事前に聞いて授業では自分の肉声で読んで欲しい。

What are ~? という質問に A and B 形式の答えが 4 回出てくるといふ明快な形の詩である。詩形は単純明快であるが、その意味するところは深く重い。このように詩は、人間の喜怒哀楽を始め、地球の自然から時には宇宙までの事象に関する詩人の思い、イメージ、心を表現したものであるから、詩を読む場合には、詩の中に込められた詩人の声に耳を

傾ける必要がある。朗読者は詩の行及び行間から詩人の心を取り出し、詩人に代わって聴衆に伝えるのである。

A and B と並列になっている名詞表現は、左側の語は具体的なもの、右側が抽象的なものである。To-day and tomorrow は、他の 3 つと少し違う印象を与えるかもしれないが、「今、まさに生きている時間」である「今日」に比べて、「明日」は明日の風が吹くと言われるほど不安定なものであるから、同種の表現パターンと言えよう。

Sea-sand and sorrow は and の両側に共に 2 音節の単語が並んでいるという意味でのバランスは取れているが、強弱強弱という詩のリズムから言えば Sand and sorrow のほうがリズムカルである。しかし、同じ砂でも海水を含んで重い砂でない「重い」という意味を悲しみと共有できないので、やはり Sea-sand に落ち着く。sorrow と tomorrow, youth と truth と単語の終わりの部分に同じ音が来ていることも、「脚韻」として詩の美しさに寄与している。

このように音やリズムの美しさを踏まえて、詩人の心の声が聞き手の耳にしみ入るように音読するのが音声によるパフォーマンスである。

3 音声パフォーマンスの評価

次の評価項目は、生徒の優れた資質を見つけるためと、教師自身へのフィードバックとして活用するためのチェックリストと考えていただきたい。

ア 散文の場合 (5 段階評価。詩の場合も同じ)

- 1) 題材 (作品) 選定の適切さ
- 2) テキストの理解度
- 3) 区切り方、ポーズ、ペース
- 4) 発声・発音の適切さ
- 5) 身体表現との調和 (視点、表情、ジェスチャー)

イ 詩の場合 (散文の 5 つの評価項目に加えて)

- 1) リズム
- 2) 情意表現の幅
- 3) イメージ喚起力

以上の評価項目は悪い箇所を減点するためにではなく、むしろ良い箇所を見つけほめてやるために活用してほしい。要は生徒が英語の音声表現に興味・関心を持ち、それを聞き読む楽しさを知ることにある。